…特別講演（第15回たびとしょCafe）

古書から学ぶ未来へのヒント

日本の観光の課題とこれから

guest speaker
西村幸夫（神戸芸術工科大学 教授）

1952年福岡市生まれ。東京大学都市工学科卒、同大学院修了。工学博士。専門は都市計画、都市保全計画、都市景観計画など。明治大学助手、東京大学助教授を経て、東京大学大学院教授、2018年より現職。和歌山県景観審議会会長、千代田区景観まちづくり審議会会長、フランス国立社会科学高等研究院客員教授、世界遺跡記念物会議（ICOMOS）副会長、中華民国文化省名誉顧問、先端科学技術研究センター所長などを歴任。著書に『西村幸夫 風景論ノート』（鹿島出版会・2008年）、『都市保全計画』（東大出版会・2004年）、『西村幸夫 文化・観光論ノート 歴史まちづくり・景観整備』（鹿島出版会・2018年）、『西村幸夫 講演・対談集 まちを想う』（鹿島出版会・2018年）など多数。（公財）日本交通公社評議員・専門委員。

旅の図書館は2018年10月11日（木）で開設40周年を迎えました。15回目となるたびとしょCafeは、旅の図書館開設40周年記念号「観光文化239号：特集 古書から学ぶ」（10／11発行）との連動企画として10月16日（火）に開催。テーマを「古書から学ぶ未来へのヒント―日本の観光の課題とこれから―」とし、ゲストスピーカーに当財団の評議員・専門委員であり、同誌の巻頭言を執筆していただいた西村幸夫氏（神戸芸術工科大学教授）をお迎えしました。

西村先生はご著書でも「観光客が伸びているまちに共通しているのは、いずれのまちにも歴史があり、まちとしての厚みがあることである。住みたくなるようなまちが人をひきつける。」と述べられています。西村先生ご自身が古書からどういったことを学ばれてきたのか、さらには古書をひもとくことで見えてくるものとは何かということについて、西村先生が影響を受けられた古書とともにご紹介いただきました。

第1部 西村先生のお話

歴史をふりかえるということ

学問は2種類あるような気がしています。一つの真理を追究するタイプの学問、いわゆる理科系の学問はそこに当てはまると思いますが、何事も最初に発見することが重要で、かつ海外で評価されなければ意味がないので英語の論文で発表することを重視しています。

もう一つは文化・文脈によって真理は違うという学問で、文化系の大半はそれに当たると思います。文化系では論文を書くのも大事ですが、むしろ思想を語ることが大事で、文化系の先生方の一番大きな仕事は主著を書くことだと思っています。

私は理科系ですが、都市計画という学問は元々制度があり、都市には人がいて、その人たちと一緒に色々なことをやっていかなければいけません。基本的には非常に文化的な学問です。従って、私も学者として、教育はもちろんのこと、きちんとした本として残したいと感じてきました。論文を書くことも良いですが、長く書かなければ背景までわからないこともたくさんあります。最近は、色々な人がSNSで発信していますが、速報性はあっても大きな話を語るには難しい訳です。

高度成長期の都市計画は、再開発をする、道路をつくる、環境をよくする、都市問題を改変することが主なミッションでした。壊して全く新しいものをつくるのが主流であり、今あるものを大事にするというのは都市計画の範囲ではなく、文化財の専門家に任せれば良いと考えられていました。しかし、私は守るべきものはきちんと守って、それを活かすような都市をつくっていくべきだと思っていました。時代が変わってきたのでこうして生き延びてはいますが、当時そういったことを実践している人がいなかったので、テーマを変えた方がいいとか、そんな考え方は主観的だとか、歴史のプロに任せればいいといったことをよく言われました。

ある時、文化的なものや歴史的なものや景観が大事であるということを、いつ、誰が言い始めたのだろうかと考えました。過去に色々なことをやった人の努力や発想の積み重ねがあって今があるのではないか。そういうことをきちんと見ることによって自分の位置がわかりますし、これからどこへ向かって進むべきかがわかるのではないかと思いました。

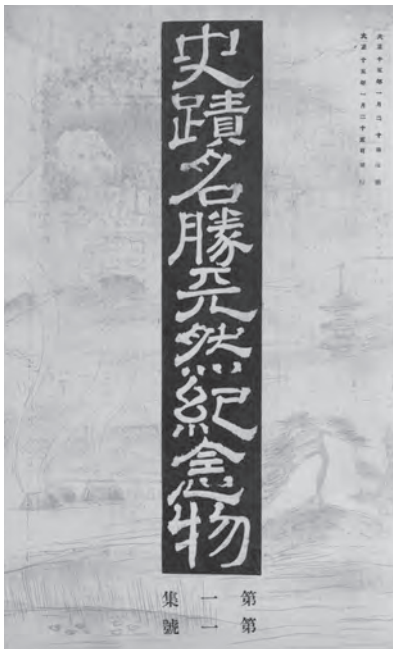
文化的景観のルーツ・日本

そんな時に出会ったのが史蹟名勝天然紀念物保存協会の機関誌である「**史蹟名勝天然紀念物**」です。この協会は、文化財保護法（1950年）の前身に当たる史蹟名勝天然紀念物保存法（1919年）ができる前から活動しており、本書には各地の保存運動が細かく紹介されています。こうした草の根的な日々の活動はなかなか形に残らないため、本当に貴重な資料です。

ところで、史跡名勝天然記念物は文化財保護法に位置づけられています。誰も手を加えていない巨石や動物も天然記念物であり、いわば文化財に当たります。名勝というのもありますが、史跡と名勝と天然記念物は全く別のものです。名勝の元々の発想は庭で、日本庭園を守ろうというのが出発点です。しかし、保存運動が盛んになっていく中で、作られた庭だけでなく自然の景色も含めて良いのではないかということになりました。難しいのは文化財としての線引きをどこでするかですが、当時の人は、詩歌に詠われたり、浮世絵などに描かれた景色を、対象化された文化的なものとして捉えました。それが景勝地です。

史跡というのは土地に刻まれた歴史、土地の記憶です。建物がなくてもここで何かが起きたことは事実なので、その頃のイメージと変わっていても文化財であると捉えました。史跡と名勝と天然記念物は全く違うものですが、それを一つのストーリーの中で保存する協会をつくって有志の方々が保存運動を始める訳です。

天然記念物を文化財の範疇に含めることになった背景には、桜の研究者として有名な三好学の存在があります。彼は4年間ドイツで桜の研究をした後に日本に戻り、東京帝国大学の植物学の先生になりますが、ドイツにいた時に、田舎の風景を大事にしようという郷土保存運動を目の当たりにします。田舎の風景というのは植物がメインです。ドイツ語でNaturdenkmalと言いますけれども、Naturは自然、denkmal



は文化財、つまり自然文化財という発想があり、それを日本語に訳したものが天然記念物です。現在では、天然記念物というと貴重な動植物というイメージが強いですが、郷土を代表する自然を保護するという考え方から始まっていることがわかります。

彼は帰国後、保存運動をしますが、バラバラで運動をしても法律論にならないため、みんなでやりましょうということで史蹟名勝天然紀念物保存協会の発足と、史蹟名勝天然紀念物保存法の制定につながる訳です。自然が文化財として守られるという制度は世界でも珍しく、なおかつ景観地が公園ではなく文化財として守られるのは恐らく世界で初めてではなかったかと思います。この考え方は後に文化的景観という名前になります。Cultural Landscapeとして1990年代に世界中に広まり、世界遺産の概念に盛り込まれたのが1992年からです。欧米にとっては非常に新しい概念です。ところが、この本を書いている人たちは1914年の段階でそのことを知っているわけです。世界でもそこまで先行して風景について考えていた国はないはずなので、大変進んでいました。おそらくドイツなど欧米の動きと日本ならではの文化がミックスされて出てきた発想だと思いますが、そういうことが一つの雑誌から見えてきます。

ちょうど私の手元には昭和9年9月号がありますが、この中にある雑報という項目に風景協会の創立について書いてあります。設立趣意書には

（※引用）

「我が國は夙こ世界の風景國として知られ、その秀麗なる國土の自然は、建国以来の光輝ある歴史と相俟って、我國文化に特異なる色彩を賦與して居るのは頗る顕著なる事實である。國民の思想、文化芸術等、悉くその美はしい風景により影響せられざるはなく、而して又國民ほど風景を愛する念の深きはないのである。

然るに現代人は動もすれば器械的文明に酔ひ、忽忙を極むる物質的生活に溺れ、我が天恵の厚きに馴れ、眞に風景を享受する心の余裕を失はうとしてゐる。」（P68、原文ママ）

とあり、現代でも通じることです。こうした考え方は戦後の権利意識と西洋化により出てきたのではないかと思われていましたが、そうではないことがこれを読むとわかります。

消え行く我が国の風景への危機感

盛岡出身のジャーナリストで新聞記者でもあった橡内吉胤（とちないよしたね）は、色々なまちを訪ね歩いていくつか本を執筆しています。『**日本都市風景**』の緒言ではこのように言っています。

（※引用）

「私はこれまで都市風景…ないし都市の個性…一概に都市の風景…都市の個性といっても、勿論その構成要素には複雑なものがあって、たとえば、その都市は山の中の都市であるとか…海辺の都市であるとか…あるいはいく筋かの河川によって貫流されておる…といった地形上の特徴や土壌の肌あいや植物の種類、あるいは、空気が澄んでいるところだとか穏やかなところであるとか、雪や雨の多いところであるとかいう気象上の特色、その他人情風俗や方言、民家の建築的特徴やその「名勝絵はがき」に出て来る名所旧蹟、輩出人物や名産名物、伝説、あるいはまた、政治の都市であるとか、商工業の都市であるとかといった社会的経済的条件による特質、それからその都市をつつんでいる歴史的背景といった雑多な要素の複合がおのずからその都市の風景を形づくるにいたるものであることが当然帰結されるんだが、まあ、そうした風景ないし個性を組みたてている上の取材を観察してみるために、永年の間、あちこちの町を彷徨してきた。けだし、旅の興味は物事に拘泥せずに、たとえば一個の巡礼者のような気持で諸々の印象を素直に受けいれるにあるんだが、私は、いささか研究的・・・研究的といっても、頭から観測科学（オブザーヴェーション・サイエンス）なんかの命ずる種々な方法に漂うていたんでは肝心の躍動しつつある風景のひらめきを逸するおそれがあることを知ってるので、ノートブック、スケッチブックその他の道具をかなぐりすて、まずもって「印象」に開

けっぱなしに徘徊することを忘れなかった。

　また、都市の風格を把握するためには、やはりそこにじっくり御輿をすえてかかるに限るんだが、不幸、時間と経済的余裕に乏しい自分は、ある都市の如きは小半日で観察をきりあげ、すぐ次の都市へ移ってゆかなければならなかった。が、こうした慌ただしい旅の裡の印象でも、それだけで心に銘記するものから、割合に比較対照のハッキリした形にもりあがってきて別段自慢するわけじゃないが、たとえば、目隠しをした自分を京都の町に運んできてヒョックラ覗かせてみても、その町を東京や大阪の町と見あやまるようなことはせんつもりだ。」（P3―P4、原文ママ）

また、

（※引用）

「私は、神戸から奈良、奈良から北陸に這入って金沢―富山と、その街々を歩いてみたが、それらの中都市の街は、もうあの大都市特有の人間生活の燃焼と群衆の醸す毒気とから解放されて、そこでは、私どもの感覚をさいなみ、エキサイトするようなものは何物もなく、たとえば、奈良名勝、猿沢の池や金沢のピカ一兼六公園を漫歩している中学生の心持と相通ずる体の一種の気安さを感ずるのであった。やはり、吾等のユートピヤは先に静岡の街を歩いて感じたように、奈良や金沢や富山ぐらいの大いさの都市に限るんだな…と今さらにその感を新たにして、私は街から街へと流れ歩いた。」（P92―P93、原文ママ）

と、中都市のことを書いています。それから田舎町の良さということで、

（※引用）

「同じ町でも都市の部類に入らん地方の小さな埋もれてるようなまちの姿を見て歩くことも愉快なものだ。そうした町には豪華な都市とはコロッと違った趣が現われている。たとえば、福井県の三国といった昔栄えた港町から東海道中の関町なんていう鈴鹿峠の下の町…あるいは信州路の追分なんていう高原の町など、それぞれに変った姿をもっている。ついこの間、白石嘶で有名な宮城県の白石町を歩いてみたんですが、街にたってる古風な土蔵造りや妻入り町家にしてからが、いかにも片倉小十郎のお城下町だった昔の面影を失せずにもっている。」（P121、原文ママ）

といったように、小さなまちも見ています。三国について書いているところでは、

（※引用）

「三国は九頭竜河口に沿うた一筋街に毛が生えた（戸数一千八百五十五戸、人口八千七百三十八人）ぐらいの…地形的にはさして特徴のない町であるが、その町家の形態にはいろいろな特徴を見つけることが出来る。昔はここはやはり同じ福井藩の中にありながら、今の福井市あたりに残っている町家と較べて見ると、あの深い両の袖壁なんどの具合を除いては、著しい相違で、総じて木造であるが、たとえば、分厚い板を縦二重に布き並べた下屋根…その目板を抑えている土地の人が〝サン〟といってる横木…・小屋根と称する廂や大屋根の鬼瓦の恰好なんてものは紛うべからざる特徴をなしているし、」（P185、原文ママ）

と書いています。

そして、面白いのは

（※引用）

「天保前後に出された『国々湊くらべ』といった湊番付で見ても、この三国は前頭の筆頭をしめ、色街としても日本五廓の一つにかぞえられただけあって、遊女の逸物もいて、揚代なども格別安かったらしい。すなわち、大関格の長崎の当時の遊女の値段が四百から一分、堺が六匁一分、関脇の博多が二朱一分、鳥羽が十二匁、小結の名古屋が二朱、前頭の三国が四百から一分で長崎と同値、」（P187、原文ママ）

と書いています。

最後のまとめに

（※引用）

「余談はともかく、私どもが、この三国のような旧い港町にもつ興味の一つは、その町の特色を摑むという事の外に我国の町という町が挙って新しいもの新しいものへと造り改えられつつある中に、この港町のような旧態依然たるものの姿を見出すことは確かに一つの驚異に値いする事実であること、が、やがてこうした姿も三国小女郎なんかの話がわずかに余命少ない古老の口ずから伝えられるのみで、年を経るに従って段々おぼろげなものになると同じように、

わずかに残っている古い街並も段々と朽ちたり壊されたきりになってしまったり、時代とともに後退って往って、これから後いくばくもなくしてまったく地上から姿を消すの日あることを思うと、この日本といういわば大きな博物館の中に保存されている昔のままの生粋の港町の形態やその町を霧かなんぞのように包んでいる歴史や伝説といったものを、単に懐かしむというよりも何とかして記録に止めておくの必要がないであろうか…ことに移り変りの劇しい今日において一層その感を深くせざるを得ない。しかもまた前にも言ったようにこうした旧い街に見出す一種の「調和の美」といったものが果たしてどうした仕組から出発してくるものであるかということを点検してみるということも、将来の街を造るの工夫をする上にも重要な暗示を持ち来たらすものではないだろうか…」（P193－P194、原文ママ）とあります。「調和の美」、良いことを言っているでしょう。こういう人がいたんですよね。おそらく関町を発見したのは彼だと思いますが、これが本になっていなかったら我々はこの人の気持ちを全然知らなかったわけです。

私は、こういう書物を通してとても元気をもらいます。自分一人ではないんだ、昔からそういう人がいたんだ、その人たちの思いを私たちは受け継ぐことができるんだと。実は都市美協会は彼が中心になって創設したものです。1920年代に都市美を推進する大きな動きが起こったことがあります。1926年に都市美協会ができて、1937年に行政が中心となって都市美協議会ができます。

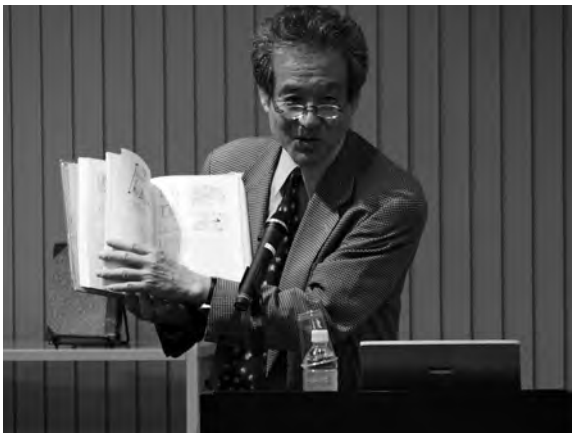
都市美協会は「都市美」という機関誌を発行しており、都市美協議会は「現代之都市美」という立派な論文集を出しています。ここでは協議会の開催報告も掲載されていますが、例えば第2回協議会では、都市美審議委員会設立に関する件、街路照明統制に関する件、広告物法改善に関する件、喀痰の取締に関する件、全国都市美協議会の継続に関する件などを決議して全国の自治体に呼びかけていました。他にも都市醜をなくすべく、汚い看板や電線、電柱をなくし、並木道をつくるという運動を続けています。都市美運動については東京大学の中島直人准教授が『都市美運動―シヴィックアートの都市計画史』という本を書いていますが、こういった歴史も戦争を境に忘れられてしまっていると言えます。

想いを形にして、次の世代につなげる「本」の意義

『**日本のすまい**』は、建築計画学の大御所だった西山夘三先生が京都大学を定年退職されて最初に取り組んだ仕事です。日本の多様な住まいを全てご自身で調査されて、イラストや図面、書物としての装丁も全て手描きで書かれています。大学生の時にこの本を手にとったのですが、こんなことを一人でやる人がいるのかと驚愕しました。学生には高額な本でしたが、すぐに買って、今でもよく見えるところに置いてあります。西山先生は日本の住宅・建築計画をつくった方です。そのためにも日本の住まいの全容を階級構成ごとに明らかにすることは必要ですが、全てやり切られたことに本当に驚きました。私は同じ立場になってこんなことはできないなと思いますが、こういう偉い先生を目標にしなければいけないと思い、大学は違いましたが、ずっと西山夘三先生のことを気にしながら仕事を続けてきました。

晩年になって我々がやっている調査の顧問として入っていただいてご一緒しましたが、このような本もこれからを担っていく人たちに受け継いでほしいなと思います。単に情報が書いてあるツールとしてというよりも、命を賭けて作られた本であるという感じがします。

今の時代は簡単に情報が発信できるので誰もが書き手になれますが、インスタントかつ印象披露のようなものが多く、しっかりと準備をして、きちんと後に残すという覚悟を持ってやるこ



とが少なくなっていると思います。当時は活版印刷なので1冊の本を作るには手間もコストもかかるので、出版するということは大変なことです。その意味で言うと、1冊の本を後世に残すというのは大変な仕事です。この時代でもそうなので、戦前にもなるとなおさらです。今、我々が簡単にネット上で垂れ流すような情報とはレベルが違う。人間の肉体はいつか滅びますが、想いが形になっていれば次の世代につながります。その意味で私は本を大事にしたいですし、過去に書いた人の想いをなんとかつなげていきたいと思います。

過去から未来へ、エネルギーを受け継ぐ場所としての図書館

最近、『**県都物語 47都心空間の近代をあるく**』という本を書きました。地域のことを調べるためには、公立図書館の郷土資料コーナーに行くと大半のものはあるので、ここ10年くらい各地の図書館を訪ねてまわりました。市史は必ず読みますが、政治史は書かれていても生活史が書かれていないものもあります。そういう時は昔の写真集をコピーしてそれを持ってまちを歩き、自分で写真を撮る。そして再度市史を読み直して、このまちをどう考えたらよいかを1ヶ月から2ヶ月くらい考え続けるという生活を10年間しました。

朝から晩まで、まるで恋人を想うようにそのまちのことを考えるんです。そうすると色々なことを思いつきます。都市にはさまざまな側面があるので色々なものの見方ができます。この道はなぜこんなに曲がっているのか、なぜこの建物がここにあるのかとか、そんなことを考えながら地域の資料を読んでいきました。橡内吉胤が『日本都市風景』で書いたようなことを、私も『県都物語』を通して書きました。

各地の図書館にはかなり助けられましたが、図書館は知識の宝庫だと思いました。情報源として最大限に活用するためにも、使う側が問題意識を持たなければいけないのではないかと思います。私は古書からエネルギーをもらって、それで私もここまでやってくることができました。できれば私が書いたものが次の世代の人のエネルギーになってくれるといいなと思います。それが捨てられずにこういう図書館に所蔵され、会ったことのない読者に何らかの想いが伝われば良い人生だったと思えるかなと。特に橡内吉胤の本と自分を重ね合わせて、そんなことを考えています。

第2部 質疑応答

参加者…都市は美を中心に語られることが多いと思いますが、猥雑さも魅力の一つではないでしょうか。

西村氏…まさにそうですね。都市の猥雑さに関しては東京の都市計画を研究され、新宿の歌舞伎町などを作られた石川栄耀先生などが語っておられます。歌舞伎町は区画整理でできていますが、コマ劇場（現・新宿東宝ビル）にぶつかるように道が通っています。グリッドで作るのではなく、突き当たりに広場的空間を配置することで猥雑で迷路のような空間にしました。実際、そういう形で今も機能しています。

参加者…西村先生が実際に訪れて、使いやすかった公立図書館はありますか。

西村氏…東京都立中央図書館の3階の地域コーナーには市史や写真集が大変充実しており感動的でした。しかもボランティアの皆さんのサポートが手厚いだけでなく、本の管理をはじめ色々なシステムが飛び抜けて素晴らしいと思いました。

参加者…西村先生のご著書『観光まちづくり』で、「まちづくりが観光へ向かうという動きだけでなく、観光地がまちづくりへひろがるという動きも同様に存在するからである。後者のうごきは観光地づくりとしてはまだマイノリティではある。」と書かれていますが、古書から知ることができる観光地というのはどこかありますか。

西村氏…例えば温泉街のトータルな魅力について議論している方はあまり見たことがないです。もしかすると当時はそういうことを議論する発想がなかったかもしれません。個別の宿がどれだけ頑張っているかについては紹介されていますが、観光地の側からまちづくりを考えて取り組んできたのは城崎温泉でしょうか。城崎温泉のあたりは、北但大震災という震災が関東大震災の2年後に起きています。地震や火事で豊岡の中心部と城崎温泉は壊滅的被害を受けます。豊岡は大きな区画整理をしましたが、城崎温泉はそれをせずに建物は3階建てで道に面したところに

建てることをルールとしました。一般的な温泉地のように一戸一戸を広くして、周りに自然があるような形にはしませんでした。今では城崎温泉は関西で一番元気のある温泉地ですけれども、北但大震災をきっかけにそういったルールで復興していったことが大きかったのだろうと思います。城崎温泉でそれがなぜできたかというと、一つは温泉の湧出量が少ないからです。湧出量が少ないと内湯を大きくできないので旅館も大きくできません。外湯を作って、そこに行ってもらうという仕組みができました。こうした制約条件があってまちづくりにつながった、ピンチをチャンスに変えた例だと思います。条件が良いところはそれぞれが勝手にやればいいという形になってしまい、あまりうまくいかないことが多いです。逆に色々な不満があるのは色々な人がまとまれるチャンスなのだと説得することが大事なのではないかと思います。

参加者…先生のお話をうかがって名所旧跡の発想の起源は歌枕にあるのではないかと感じました。古典和歌に繰り返し詠まれた歌枕は日本人の神話時代の記憶と結びついているといわれています。平安時代に詠まれた古今和歌集の序に紀貫之が枕詞という表現で歌枕の概念を示しているそうです。このような和歌の文化が、先生がおっしゃられた景観を保存する概念に先駆けて生まれたルーツではないでしょうか。

西村氏…例えば「奥の細道」は西行の歌枕を訪ねる旅ですよね。そこで詠われた歌と場所が一緒になって物語になっていて、その物語を確認する旅だったので、そういうこともあるかと思います。実は日本人がこういうことにものすごくセンスがあるなと感じることが時々あります。2015年に「舞鶴への生還1945―1956シベリア抑留等日本人の本国への引き揚げの記録」がユネスコの世界記憶遺産に認定されました。そもそもシベリア抑留から帰ってくる時に手書きの書類等は持って帰ってはいけないことになっていましたが、日本に持ち帰られたものが結構あり、その多くが和歌だといいます。書くものがないので白樺の樹皮に削るようにして書いて、体のどこかに隠して持って帰ってきたそうです。苦しい強制労働の中で、和歌を詠んでいくことが自分の生きるエネルギーになっていたということです。それを知ったときに私は文学の力のようなものを感じました。

参加者…私も学生時代に西山夘三先生の『日本のすまい』を読んで感動し、民家の住まい方に関する調査をしていました。西山先生のエピソードがありましたらもう少し詳しくお聞きしたいです。

西村氏…西山先生はすごく細かい方で、麻の布でできたスケッチ帳に細かく記録されていらっしゃいました。年代ごとに日付が書かれたスケッチ帳が全部残っており、「西山文庫」という形で門下生によって整理されています。『日本のすまい』のように全て自分でやってしまわれるので、教育のためにも若い人に任せれば良いのにと思いますが、先生の元では大変優秀な方が育っていらっしゃいますので、教育というのは難しいものだと思います。とても厳しい先生だったので私もいつも緊張していましたが、先生は補聴器を付けてまで私の話をメモを取りながら聞いて下さって、恐縮至極でした。

参加者…世界に先駆けて保存運動をおこない、風景協会までつくった日本人がなぜこのような美しさからほど遠い都市田園景観をつくってしまったのでしょうか。いつどこで思想が断絶されたのでしょうか。

西村氏…おそらく戦後復興の中で全てが途切れたと思います。戦争がなければ当時の思想が現在につながっていたのかなと思います。戦争を境に当時の思想を一から構築し直し、常識として結実化するまでやっていかなければいけませんが、ようやくそういう時代になってきたかと思います。戦争というのは本当に心を荒廃させてしまったという感じがします。

参加者…今日のタイトルである「古書から学ぶ未来へのヒント―日本の観光

の課題とこれから―」に結び付くような事柄をいくつかご紹介いただけますか。

西村氏…先ほど紹介した城崎温泉は良い例かと思います。豊岡市はすごく面白いところで城崎温泉と豊岡は全く違う生き方をしてきました。震災復興により形成された豊岡のまちと建物は興味深いです。豊岡の駅前は放射状に道が出ていますが、国立の駅前に似ています。というのも国立は関東大震災の復興経緯を見ながら冷静に自分たちの地域の復興を考えることができたからです。その一方で城崎温泉や小さな城下町である出石は北但大震災の被害をそれほど受けなかったので、昔ながらの街並みの中に新しい建築家が入ってきて学校や役場をつくったりしています。竹野という港町は海水浴やカニで有名ですけれども、川港の雰囲気がよく残っています。個性の違う5つの地域が合併して一つのまちになって、それぞれに魅力がある。こうした地域は戦前からの動きが現在の個性につながっているという意味で参考になるのではないでしょうか。

参加者…1926年に柳宗悦らによって提唱された民藝運動のように、民衆の生活に美を見出す考えと共通していると思いました。この時代は都市美と民藝運動などの関わりはあったのでしょうか。

西村氏…都市美で民藝運動の話が話題に出てくることはあまりないと思いますが、時代としては重なっているので、こういったものを大事にするという時代の雰囲気はあったかもしれません。

明治30年あたりから約10年間で国内の鉄道が急速に敷設されていきますが、それに伴って都市構造が大きく変化していきます。距離感覚も変わり、それまでは徒歩でしか移動できなかったところが汽車を使えばかなりの距離を移動できるようになります。もちろん都市と都市との関係性も変わってきます。地域の色々なものを保存する運動団体はこの時代に生まれました。大きな変革の中で、もう一度郷土のアイデンティティを取り戻さなければいけないという発想が出てきた時代だと思います。

おわりに

当日は46名の方にご参加いただきました。参加者の皆様からは、「昭和初期には街並みをはじめとして自然景観まで保存・保護しようとする人々がいたことが嬉しかった。現在さびれていると言われている街にこそ、本当は古いものの良さがあるのではないかと思う。そういう街を再発見していきたい」「お話の内容が新鮮で啓発されました。先生の実体験とお人柄に基づくお話が印象的でした。改めて「古書」に関心を持ちました」「改めて我が国の観光振興に深い興味と自信を得た」「西村先生の熱い思いが伝わり、新しい視点、考え方を学べた。40周年記念ということで「観光はそれ自体が文化であり、その文化を向上させたい」という旅の図書館の開設当時の想いもわかってよかった」といったご感想をいただきました。

今回、開設40周年を迎えた当館では古書に焦点を当てた取り組みをおこなっています。その背景には、今回、西村先生にお話しいただいたような、意外な発見や事実が古書から得られること、先人の視点や想いからエネルギーを得られること、自身のアイデンティティのルーツを知ることで未来に向けてどう歩んでいくべきかのヒントを得られることなどを多くの方に知っていただきたいと思ったからです。そして西村先生のお話からも、地域の、そして日本の観光の未来を考えていく上での古書との付き合い方、読み解き方について多くのご示唆をいただきました。過去から未来へ、歴史とエネルギーを受け継ぐ場所である図書館としての役割も再認識した上で、これからの当館のあり方を考えていきたいと思います。

（観光文化情報センター　旅の図書館長
企画室長 主任研究員 福永香織）

参考文献

「史蹟名勝天然紀念物」史蹟名勝天然紀念物保存協會・力江書院1914年～1944年
（本稿での引用は「史蹟名勝天然紀念物」史蹟名勝天然紀念物保存協會・教育研究會，1926年～1943年）
『日本都市風景』橡内吉胤・時潮社，1934年（本稿での引用は『日本都市風景』橡内吉胤・筑摩書房，1987年）
『都市美』都市美協会，1931年4月（第1号）～1942年5月（第39号）＊第15号は休刊
「全国都市美協議会研究報告 第1回 現代之都市美」都市美協会編・都市美協会，1937-1938年
『都市美運動―シヴィックアートの都市計画史』中島直人・東京大学出版会，2009年
『日本のすまい（壱）』西山夘三・勁草書房，1975年
『日本のすまい（弐）』西山夘三・勁草書房，1976年
『日本のすまい（参）』西山夘三・勁草書房，1980年
『県都物語 47都心空間の近代をあるく』西村幸夫・有斐閣，2018年
『観光まちづくり まち自慢からはじまる地域マネジメント』西村幸夫 編著・学芸出版社，2009年
機関誌『観光文化239号：旅の図書館開設40周年記念号 特集 古書から学ぶ』（公財）日本交通公社，2018年